

## 「壺中之展」と大阪市立美術館の八〇年

森橋 なつみ

はじめに

二〇一六年、大阪市立美術館は開館八〇周年を迎えた。春には「王羲之から空海へ―日中の名筆 漢字とかなの競演」(四月十二日～五月二十二日)、夏には「デトロイト美術館展 大西洋を渡ったヨーロッパの名画たち」(七月九日～九月二十五日)と、周年を祝うにふさわしい大型の展覧会を華々しく開催してきた。そしてこの秋、当館の所蔵作品と寄託作品によって「壺中之展―美術館的小宇宙」を開催した。本稿では、この「壺中之展―美術館的小宇宙」の開催報告とともに、展覧会で触れた内容に沿って、大阪市立美術館の八〇年を振り返りかえってみたい。

壺中之展について

開館八〇周年記念展「壺中之展―美術館的小宇宙」は、十一月八日から十二月四日の四週間(開館二十四日間)にわたって、館蔵・寄託の名品二八八件(目録は展示の構成上、親番号を二二八までとする)を出陳した。先の大形展に比べれば予算規模は決して大きく

ないが、在阪五社の新聞社の協力を得られたこと、また来館者からの口伝えやツイッターを活用したことなどによって日を追うごとに入館者数を増やし、最終的に一三、九四二人の来場があった。会期中何度も来場する方、また近年の傾向でもあるが、中国や韓国、台湾など海外からの利用者を会場でよく見かけたのが印象的であった。

大阪市立美術館では、これまでも周年にあわせて館蔵・寄託の名品を一挙に公開する展覧会を開催しており、七〇周年であった二〇〇六年には「大阪人が築いた美の殿堂―館蔵・寄託の名品から」と題して六六八件の作品を紹介した(前後期展示替えあり)。今回、規模は前回の七〇周年におよばないが、館を代表する名品を揃え、また各章にテーマを設けて館の歴史と作品に親しみやすい展示を心がけた。展示は六章に構成、さらに各章に小テーマを設け、学芸員が分担してそれぞれ企画展示した。会場は本館南一・二階と北二階の三フロア計十二室および二階回廊を使用した。

各展示については後ろの頁にまとめた〈展示概要〉を参照いただきたいが、全体の流れだけここで触れておこう。南一階に第一章

美術館小史「美術館とコレクション」、第二章 美術鑑賞入門「かたちをたのしむ8・0・壺」、つづいて北二階に第三章 日本美術①④「桃山人―肖像画レクイエム」「洗練華麗の極み」「爛熟の江戸文化」「文人趣味と中国への憧れ」、南二階に第四章 中国美術①②「書韻画情」「雕刻時光」、第五章 仏教美術「尊キモノ」、そして二階回廊南北に第六章「想い出のおおさか」とした。冒頭の第一章で美術館の歴史とコレクションについて紹介し、第二章では少し肩の力を抜いた作品鑑賞を提案、第三から四章では館の特色たる名品を中心にならば、第五章では寄託の優品を展示、そして終章の第六章で美術館を育ててきた大阪の過去を作品によって振り返った。もちろんすべてを紹介できたわけではないが、ぐるりと一周すれば、大阪市立美術館についてあらまし理解いただける構成であったように思う。学芸員全員が展示に携わり、展覧会の関連イベントとして毎週末、土・日曜日と交代でギャラリートークと講演をおこない、展示の魅力を余すことなく伝えられるよう企画した。

さて、このように豊富な内容をもった八〇周年記念展、「壺中之展―美術館的小宇宙」と題しているわけであるが、これは『後漢書』方術伝にある「壺中之天」の故事から採り、世界をあらわす「天」を展覧会の「展」に振ったものである。壺を美術館に置き換え、うちに広がる別天地（小宇宙）に酔いしれていたかどうかというのが趣旨であった。チラシ・ポスター等広報のメインヴィジュアルには、当館の収蔵品第一号である橋本閑雪「唐犬」から図像を取り、壺型のシルエットと組み合わせさせたデザインを採用した。

### 美術館の歴史とコレクション

本展の開催は八〇周年の記念として主に名品を一挙に展観するものであったが、展覧会の導入として、冒頭一章に美術館の歴史とコレクションについて紹介する展示を設けた。ここからは第一章で扱った内容に沿いながら、ささやかに美術館の八〇年を振り返り、また美術館の基幹コレクションについて改めて触れておきたい。な



広報チラシ（右：表面、左：裏面）

お、大阪市立美術館の歴史については望月信成『ひと筋の細い道』(一九八四)、『大阪市立美術館五十年史』(一九八六)などに詳細にまとめられている。本稿では五十周年までを主にこれらに拠って振り返り、その後本年までの三十年は別途資料を紐解きながら略述しておく。<sup>①</sup>開催した展覧会等、紙幅の都合上触れないものも多々あるが、本稿の後に編んだ年表によってこれを補いたい。

#### (1) 開館にむけて

昭和十一年(一九三六)五月一日、大阪市立美術館は天王寺の地に誕生した。それが大変な難産であったことは、これまで何度も語られてきた。開館より遡ること十六年、大正九年(一九二〇)三月三十日の大阪市会において「大正八年陸軍特別演習行事の際の御下賜金(三千元)及び財政上の余裕金(壹百万円)円を基金」として、美術館の建設が決議された。当初の計画では大正九、十年度にかけて内容調査並びに設計、大正十一、十二年にかけて建築および諸設備を完成させ、大正十三年の四月に開館を予定していた。

はじめ、美術館の建設地は大阪城址(天守閣再建前)内を第一候補としていたが、当時その場に置かれていた陸軍第四師団司令部との交渉がうまくゆかず、実現しなかった。候補地を決めかねている中、住友家十五代当主住友友純(号春翠)氏より本邸敷地と慶沢園、および古戦場の茶臼山を美術館の建設・公園としての利用という条件のもと、大正十年十二月六日付で寄付の申し出があった。かくして美術館は現在の天王寺茶臼山の地に建設されることとなった。

建設がいよいよスタートした矢先、大阪市庁舎(中之島旧庁舎)建設のあおりによる財政難から工事が遅延し、さらに大正十二

年九月に発生した関東大震災が大きく影響して大幅な遅れを生んだ。ようやく基礎工事が完了して地鎮祭が行われたのが昭和三年(一九二八)一月十八日、翌四年一月二十二日に上棟式が執り行われた。ついで昭和五年五月には鉄筋コンクリート工事が完了したが、世界恐慌は日本にも影を落とし、大不況によって工事が中断。再開された昭和九年、外装工事が竣工するも九月に第一次室戸台風が大阪を直撃し、またもや工事の遅延となった。

度重なる工事の中断と遅延を余儀なくされた美術館は、当初の予定から大いに遅れて昭和十一年、ようやく開館の運びとなった。五月一日に落成式が執り行われ、翌二日から二十四日までの十九日間、落成記念展として「改組第一回帝国美術院展」が開催された。入場者は八万八七〇〇人余りと大変な盛況であったという。<sup>②</sup>ここに出品されていた橋本関雪「唐犬」など六点が買い上げられ、美術館にとってはじめての所蔵品となった。また同年九月十一日、南館の内部工事の終了をもって美術館の全設備が揃い、開館記念として「名宝展」が開催されている。御物の出陳をはじめ帝室博物館や寺社、諸名家の出陳協力を得て国宝を含む古美術の名品、西洋画、西洋彫刻など三七四件の並ぶ壮観な総合美術の展覧会であったという。

#### (2) 美術館の戦中戦後

「芸術の殿堂」と謳われて、開館の年度は帝展・名宝展ほか合わせて七つの特別展を矢継早に開催していったが、翌年七月に盧溝橋事件が発生、折しも時代は戦争へとむかい、次第に美術館の活動も緊縮を迫られていくこととなった。昭和十七年(一九四二)、美術館は軍部に南館一階などを部分接収され、高射砲師団司令部が配さ



阿部房次郎(1868-1937)



武藤金太(1898-1966)



住友友成(1909-1993)

れた。戦中は制限を受けながらも展覧会を継続していたが、昭和二十年、終戦後に今度は連合国軍によって全館を接収されてしまう。美術館での活動の停止を余儀なくされ、立ち退きを強いられた。美術館員は事務所を転々と移し、公募展の開催などで日々を過ごしていたが、昭和二十一年、寄寓していた難波の元精華国民学校に作家の育成を目指した「大阪市立美術館研究所」を発足させた。この時生まれた美術研究所は、現在も大阪市立美術館に付設されている。さて少し前後するが、この時期、美術館の基幹コレクションとなる三つの寄贈を受けている。昭和十七年、東洋紡績株式会社社長であった阿部房次郎蒐集の中国書画一六〇件が、子息の孝次郎氏によって当館に寄贈された。伝王維「伏生授経図」（重要文化財）をはじめとする名品を含んだ、国内外に知られた当館を代表するコレクションである。また翌十八年には、実業家・政治家として著名な武藤山治氏子息の金太氏より小西家伝来の尾形光琳関係資料三十三件が寄贈された。現在、重要文化財に一括指定されている本資料は、光琳の子寿市郎の養子先であった小西家に伝えられたものであり、武藤家への譲渡、そして当館への寄贈の経緯は、よく知られているように多分にドラマチックなものであった。さらに昭和十九年には住友家十六代当主住友友成氏より「関西邦画展」（昭和十八年開催）

出陳の日本画二十件の寄贈を受けた。上村松園「晩秋」などの優品を含む作品の寄贈は、美術館の館藏品が未だ十分でないことを鑑みてのことであった。

昭和二十二年（一九四七）十一月、粘り強い交渉の末、美術館の接収解除が実現した。連合国軍の去った美術館は、陳列ケースの破損、壁のペイント、バスケットボール等に使用された展示室など、復旧に時間のかかる状態であったという。開館して十年余りで美術館はすっかり荒れて果ててしまったが、幸いにして接収時に封印を約束していた収蔵庫の作品はいずれも無事であった。翌二十三年、十分な復旧ではないものの、美術館は新しいスタートを切り、再開記念展として「西洋美術名作展」、また長らく実現していなかった古美術の展示「肉筆浮世絵展」などを開催した。

この頃の美術館界隈について以下のような証言がある。（「前略」）この頃から、天王寺駅とアベノ筋一帯に、ヤミ市が所せましと立ち並び、あらゆる生活物資が販売され始めた。それに並行して、公園の入口の広場では、アコーディオンを奏でる楽士を取り囲んで一般通りすがりの民衆が、流行歌を皆で歌う、青空音楽会が自然発生した（後略）<sup>3</sup>。現在では見られなくなったが、長らく天王寺公園周辺にはこういった雰囲気が残ったのだろう。

昭和二十四年、戦後復興の機運の中、美術館としての社会的役割を自覚を強めていた頃、一月の法隆寺金堂壁画の焼損を期に、広く美術への認識を求めて「美術館友の会」を発足させた。また昭和二十五年の文化財保護法制定に向けて他館と協力して取り組み、勸告承諾出品館に認定されている。翌二十六年十二月に制定された博物館法により教育委員会所管へ変更されると、組織も大きく変わった。

### (3) 美術館の大改修

戦時下で美術館が受けたダメージは大きかったものの、しばらくは開館に最低限の修復にとどまるしかなく、昭和三十年代に入ってからようやく内装を中心とした改修が実現した。昭和四十年に入ると館自体の老朽化が進行し、昭和四十七年度から部分改修をはじめ、昭和五十二から五十四年の三か年計画で大改修を行った。改修は会場空調化工事を基本として、クロス張替や照明などの基本設備も全面的に整備・新設された。また館内の美観を整えるべく中央ホールは大理石張りとなり、ホール天井には大シャンデリア二基が新設された。この大改修によって現在の美術館本館部分は整えられたが、その後、本館南館やあべのベルタ三階の展示室（現在は廃止）を利用していた美術団体展覧会が年々増加していくことを受け、平成四年には大阪市立美術館の地下二階に新展覧会室が開設された。ここにおいて現在の美術館の姿となった。

大改修によって美術館が大きく生まれ変わったこの頃、館のコレクションも大きく充足されたのでここで触れておきたい。昭和四十九年（一九七四）、収集家の岡村蓉二郎氏から中国金石拓本のコレクションを一括購入し、氏の雅号をとって師古齋コレクションとした。また同年六月、中島小一郎氏より葛飾北斎「潮干狩図」他三件の寄贈をうけたが、これらは現在いずれも重要文化財に指定されている名品である。昭和五十二年、当館員による調査・整理が機縁となって関西の実業家、山口謙四郎氏蒐集の中国石造彫刻一二五件、青銅器五八件、陶磁器二九件ほか全二三四件が譲渡された。なかでも中国石造彫刻群は北魏から隋唐に至るまで記年銘をもった優品が数多く、質・量ともに充実してコレクションの特色をなしてい

る。また昭和五十五年、五十七年、六十二年と三回にわたって、田万清臣氏・明子夫人蒐集の日本・東洋美術六六三件が寄贈された。「銅湯瓶」など四件の重要文化財が含まれ、平成二十六年には狩野宗秀「四季花鳥図屏風」が新たに指定され、これに加わり計五件となった。さらに昭和五十年以降数回にわたって譲渡されたU.A.カザール氏蒐集の日本近世・近代の漆工芸を中心とした約四〇〇〇件のコレクションは、研究者でもあった氏の慧眼を経て集められた特色ある内容をもっている。



山口謙四郎(1886-1957)



岡村蓉二郎(1910-1991)



田万清臣(1892-1979)・明子



ウゴ・アルフォンス・ガザール  
(1888-1964)

(4) 主な展覧会と収集（昭和六十一年以降）

全館を改修し、コレクションもますます充実してきた美術館。ここからは開催してきた展覧会についても少し触れておきたい。なお、昭和六十年までの記録は『大阪市立美術館五十年史』に詳細があるのでここでは触れず、それ以後の主なものについてみていきたい。

昭和六十一年（一九八六）、開館五〇周年をむかえ、記念展として「館蔵名品選」を三部構成で開催した。当時約六五〇〇件をかぞえた収蔵品の中から約七〇〇件を選び、第一部「中国の美術」（四月二十九日～六月一日）、第二部「日本の美術」（六月十日～七月六日）、第三部「地中海から東南アジアの美術」（八月八日～八月三十一日）として、四月の末より約一カ月ずつ、会期を分けて展観する規模の大きなものになった。同年は付設の美術研究所も周年を迎え「四〇周年記念展」を開催した。

昭和六十二年（一九八七）、天王寺博覧会の開催は天王寺公園内に大きな変化をもたらした。「いのちいきいきー人・いきものの共存をめざして」をテーマとして八月一日から十一月八日の一〇〇日間の会期で開催され、今も天王寺公園内に残る安藤忠雄設計のテーマ館（現在は植物温室・映像館として利用されている）も建てられた。また、天王寺動物園が旧天王寺野外音楽堂跡地を編入して拡張・リニューアルされたのもこの時である。博覧会には会期を通して約二五〇万人の来場があったという。大阪市立美術館では博覧会に合わせて、中国陝西省博物館の協力のもと「中国陝西省出土文物 金龍・金馬と動物国宝展」を大阪二十一世紀協会と共催で開催した。博覧会の余韻さめやらぬ翌六十三年には、尾形光琳「燕子花図」が新たに収蔵品に加わり、小西家伝来・尾形光琳関係資料とあわせて、

光琳の画業を知る貴重なコレクションとなっている。

平成に入り、美術交流が一層盛んとなる中で、他館において当館のコレクションをまとめた形で紹介する機会も増えた。平成二年、茨木県立歴史博物館にて「大阪市立美術館蔵中国の美術―彫刻と絵画―」（九月十八日～十月二十一日）が開催され、阿部コレクションの中国絵画四十三件と山口コレクションの中国石彫仏五十一件が公開された。両コレクションを一堂に会して他館で披露する初めての機会であった。また平成六年、大阪市と上海市の友好都市提携二〇周年を記念し、四月十八日から五月八日まで上海博物館（当時上海市河南南路に所在）にて当館所蔵の中国書画コレクションを展観した。その交換展として、両館の収蔵品から一八九件をあつめた「中国書画名品展 筆と墨のメッセージ」（五月二十四日～六月二十六日）を大阪市立美術館にて開催している。

平成八年（一九九六）は開館六〇周年にあたり、記念展として「大阪市立美術館の名品」（十月十五日～十一月十七日）を開催した。またあわせて美術館のコレクションや歴史をわかりやすく解説した『見る知る遊ぶ―大阪市立美術館探検ガイド―』を刊行している。六〇周年をむかえ、館内の展示環境を向上させるべく、翌九年度から十年度にかけて南館二階の改修工事が執り行われた。このリニューアルにあわせて数量の多いカザールコレクションに親しむ機会を増やすため、専用の展示ケースが新調された。平成十一年（一九九九）、工事の完了を受け、ギャラリリーリニユーアル記念特集展示「漆と黄金（ゴールドラッカー）―技と遊びの小世界―」を開催し、カザールコレクションの中から江戸末から明治の根付・蒔絵装身具・調度を展観した。

平成十二年（二〇〇〇）、日蘭交流四〇〇周年特別展覧会「フェルメールとその時代」（四月四日～七月二日）では「青いターバンの少女」（オランダ・マウリッツハイス美術館）をはじめとするフェルメールの代表作五点とデルフト派の作品約四〇点を並べた。開催前から話題を呼び、また当館の単館開催であったことも関係したためか、来場者は会期を通して五十九万人におよび、現在も当館の入館者記録となっている。現在は天王寺公園の再開発で姿を消してしまつたが、この展覧会の盛況を受けて美術館へのアプローチであった慶沢園南門側の散策路に「フェルメールの小径<sup>こみち</sup>」と愛称がつけられた。

平成十六年（二〇〇四）、泉屋博古館分館（東京・六本木）の開館三周年を記念して、当館所蔵の住友コレクションの近代日本画全二十点を陳列する展覧会が開催された。泉屋博古館は、周知のとおり住友家が蒐集したコレクションを保存・展示している美術館であり、住友家から土地や作品の寄贈を受けている当館とは所縁が深い。この展覧会を機に当館の住友コレクションを全点収録した図録『住友コレクションの近代日本画―関西邦画展覧会―』が上梓されたことは当館にとって幸いであつた。

平成十七年（二〇〇五）、小野順造氏蒐集の中国彫刻十九点を譲渡されたことを受けて、特集展示「小野順造コレクション 中国彫刻」を開催した。小野コレクションの購入は、山口コレクションと合わせて当館の中国石造彫刻群の益々の充実につながっている。なお展覧会からは少し話がそれるが、この年、戦前の建築のため不便も多くなつた美術館の状況を鑑み、大阪市が推進する「人にやさしい街づくり」事業（バリアフリー整備）に関連し

て、美術館正面に車椅子用のスロープが設置され、館内には身障者用のトイレや乗用エレベーターも設置された。

平成十八年（二〇〇六）、開館七〇周年を迎えたこの年は、春に「書の国宝 墨蹟」展、夏に「プラド美術館展」、そして秋に「大阪人が築いた美の殿堂 館蔵・寄託の名品から」展を開催した。この周年記念展については冒頭に触れた通りで、これに合わせて『大阪市立美術館所蔵作品選』を刊行した。蔵品図録は先の五〇周年展にあわせても刊行しているが、その際未収録であつた作品を補い、個別解説に英訳を付している。

平成二十三年（二〇一一）、この年、二つのまとまつた陶磁器のコレクションを受贈した。一つは富本憲吉記念館（奈良・生駒郡安堵町、二〇一二年閉館）館長であつた辻本勇氏蒐集の富本憲吉作品が、遺族により当館に寄贈された。この受贈を記念して陶磁器八十



辻本 勇 (1922-2008)



小野順造 (1916-1989)



田原一繁 (1934-2009) ・ 元子

件とエッチングや図案類二十件による特集展示「受贈記念 辻本勇コレクション 陶芸家・富本憲吉の世界」(一月五日〜二月十三日)を開催している。もう一つは耳鼻咽喉科医師であった田原一繁氏蒐集の鍋島焼一一八件であり、夫人の元子氏により当館に寄贈された。これを受けてコレクションの全てを展観した「田原コレクション受贈記念 色鍋島・藍鍋島」(八月二日〜九月四日)を開催した。

これまでも触れたように大阪市立美術館のコレクションは、その大部分が多くの関西を中心とした篤志家によってもたらされたものであり、現在につづくまで毎年寄贈の申し出をいただいている。「唐犬」からはじまったコレクションも、いまや約八四〇〇件をかぞえ、一地方にとどまらない文化史における大きな財産となっている。近年、海外からの出品依頼もたびたびあり、平成二十四年には香港藝術館において阿部コレクションを紹介する展覧会「大阪市立美術館蔵 宋・元・明中国書画珍品展」が開催され、中国書画三十八件を貸し出した。また、平成二十五年には「再発見!大阪の至宝―コレクターが愛したたからもの―」と題し、当館コレクションをはじめ、大阪市立の博物館・美術館に所蔵される名品によって、その収集の歴史とその魅力を広く周知するための展覧会も開催した。

そして平成二十八年(二〇一六)、八〇周年を迎えた大阪市立美術館。このたびの記念展を通して、館が歩んできた道程や先人たちの重ねた想いが如何ばかり伝えられたのか、少しばかり心もとないが、「壺中之展」のなかで美術館の過去に邂逅し、今ここに伝えられた作品の世界に遊んでいただけたならこの上なく幸いである。

## おわりに

昭和五十八年(一九八三)に、市政一〇〇周年事業として決定した近代美術館の建設も、念願叶って大阪新美術館と名を改め、近く実現されると聞く。大阪に新しい美術館が生まれようとする一方で、平成二十七年(二〇一五)、大阪市立美術館は希少な戦前の大型美術館建築として国の登録有形文化財(建造物)となった。難産の末に生まれ落ちた建物は、八〇年の年月を経て歴史に刻まれることとなった。美術館の建物が着実に齢を重ねる傍ら、美術館の組織は近年大きな変革を求められている。平成十九年、教育委員会からゆとりとみどり振興局に所管が移り、平成二十五年度からは経済戦略局に組織替えされた。また、平成二十二年度から財団法人大阪市立博物館協会(平成二十四年度から公益財団法人)の指定管理を受けている。昨今は地方独立行政法人化への流れの中で、新たな体制へ向けて動き始めている。

近日、天王寺公園も「てんしば」を中心にすっかりと様変わりし、多くの家族連れでにぎわいを見せている。美術館を取り巻く環境が絶えず変化していく中で、美術館としての本来的な機能を維持しながら、八〇年のその先へと歩みを進めていきたいと思う。

(大阪市立美術館学芸員)

註

- 1 大阪市立美術館の歴史については主に次の資料を参考とした。望月信成『二筋の細い道』（清文堂出版、一九八四）、村松寛『美術館散歩』（河原書店、一九六〇）、『大阪市立美術館二十年史』（一九五六）、『大阪市立美術館五十年史』（一九八六）、『見る知る遊ぶ―大阪市立美術館探検ガイド―』（一九九六）、『美をつくし』（大阪市立美術館定期刊行物、一九五八）
- 2 落成記念展など開館年の展覧会については『大阪市立美術館年報第一昭和十一年度』（一九三七）を参照した。
- 3 坂本哲「戦中・戦後の美術館界限 ウロ覚え 2」『美をつくし』（一四八、一九九七）

〔付記〕

本稿中の肖像写真については、『大阪市立美術館所蔵作品選』（二〇〇六）から転載した。なお、岡本蒼二郎氏は「岡本蒼二郎回顧展」冊子（現代中国藝術センター、一九九二）、辻本勇氏は「受贈記念 辻本勇コレクション 陶芸家・富本憲吉の世界」展図録、田原一繁・元子夫妻は「田原コレクション受贈記念 色鍋島・藍鍋島」展図録からそれぞれ画像を転載した。



開館当時の大阪市立美術館